The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 「トコロ」の意味と機能 |
| Author(s) | 寺村, 秀夫 |
| Citation | 語文. 1978, 34, p. 10-19 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/68640 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 「トコロ」の意味と機能

寺村秀夫

## 一　いわゆる「形式名詞」の本質とその研究

トコロ、コト、ハズ、ママといったことばの意味的・構文的特異性については、つとに山田孝雄が「名詞中特別の注意を要するもの」としてとり上げ、また松下大三郎が「従来の九品詞では説けない」特殊な名詞として「形式名詞」を立てて以来、名詞の一つの下位類の特性として、つまり品詞論の枠の中で記述されるのがふつうになっている。

しかし、これらの名詞は、その意味的多様さが、構文機能の多様さと相関しているところにその特質があり、本質的に品詞論のレベルで扱い切れない問題を含んでいる。

そのことは、松下の「形式的意義ばかりで実質的意義を欠」き、先行する、いいかえると修飾する、語句によって「その欠陥が補給される」ものだとする定義（『標準日本口語法』'30）や、よりくわしい山田の特徴づけにもおのずから現れている。山田はこれらを大きく二種に分け、「故・為・時・間・処・事・物・ほど・位・ころ・条・件」などのように、「その意義頗広汎にして、単独にてはいなる意義なるかを仔細に捕捉し難きまで見ゆるもの」と、「前、後、上、中、下、左、右、前（サキ）、後（ノチ）、始、中、終」のように、「事物の間の関係を抽象的にあらわせるもの」とがある、とし、全部に通ずる構文的特徴として、「皆その概念をあらわし、文の主となり、客となり、補いとなり、又添加語となる等は他の体言と異なる点なけれども、その意義甚広汎なれば必ずこれを制限せしむるがために他の説を上に加へざるべからず」ということを挙げている。（『日本文法論』'08）

このような意味的・構文的特徴を共有する名詞についての観察をさらに広げたのは佐久間鼎で、その「吸着語」という命名には、これらの語の用法を構文論的な角度から記述しようという姿勢がうかがわれる。（『現代日本語の表現と語法』'66）

山田、松下に共通しているのは、これらの名詞を文法上どう扱うかは、品詞分類の根本原理に関わるものだということを認識していたことであろう。当時の西洋の伝統文法でも、またそれに影響された国文法でも、品詞分類の原理は意味的特徴づけであった。例の、「名詞はものの名を」、動詞は「事物の動きを」という類の定義である。松下はいう。「これら〔こと、もの、筈、為〕を所謂る名詞の中へ加えるとすれば、「名詞は事物を名づける詞である。」という定義は立たなくなる。「筈」「為」などが名であって「此れ」「其れ」な

どが名でないとは云えない。」このことを彼は「名詞」を「本名詞」「代名詞」「未定名詞」「形式名詞」の四つに下位分類することによって解決しようとしたわけである。しかし、重要なことは、従来の伝統的な定義に合わないのに、なぜ彼が「こと、もの、筈」などを「名詞」としなければならないと感じたか、である。

山田も松下も、西洋文法を安易に日本語に適用しようとする従前の定説ないし俗説に挑戦しながら、なお文法体系を意味を基礎として組み立てようとするところは変わらないが、これらの語を名詞のうちの特殊的なものと見ようとする底には、構文論的な考慮が働いていた（あるいは優先していた）と考えてよいと思う。さらに忖度するならば、名詞の中でも「名詞性」の程度に差があるというようなことも感得していたのではないだろうか。

現代の言語学、たとえば生成変形文法でも、シンタクスと語の意味のからみ合いは最も根本的な問題の一つで、見解の差も大きい。変形文法の初期には、シンタクスの部門で各言語のまず基本的な文の構造が規定され、その構成要素の末端に、辞書部門からとり出された単語（その「品詞」も意味も既に定まったもの）が〝挿入〟される、そしていわゆる「深層構造」ができる、というふうに考えられていた。しかし、自然言語の仕組みはもっと複雑で、このようなモデルが単純すぎることが次第に明らかになってきている。その一つに、語の品詞もその意味内容も、構文と離れたところで自立的に存在するのでなく、構文との相関の中で確定する、という点があるといってよいだろう。

漠然と「形式名詞」と呼びならわされている一群の名詞の正体の複雑さは、このような一般言語学にとって常に古くて新しい問題を考える上で恰好の題材だと思われるのだが、その正体に迫る努力が充分に積み重ねられてきたとはいえず、山田、松下、佐久間以来いかほども進んでいないとさえ思われるのである。第一、「形式名詞」と誰もが口にしながらその内容がはっきりしない。それが名詞の階層的な下位分類の一つなのか、そうとすれば他にどんな何々名詞があるのか、それらは並立しているのか何らかの上下関係にあるのか、階層的でないとすれば名詞の「素性」の一つと考えるのか、また、上のどの立場をとるにせよその分類の原理が何であるのか、等々といったことが未解決のまま、あるいは各自が勝手に解決していて共通の理解のないまま、漠然とこの名称は使われ、そしてどの立場から見てもそれと認められるハズ、ママ、モノ、トコロなどがそれらの〝代表〟として挙げられるにとどまっているといってもあながち言い過ぎではない。われわれはここでもう一度山田、松下の出発点に戻って考えてみる必要がある。

先に述べたように、これら一群のことばの扱いは、品詞論の根本原理に関わるということを、山田、松下は理解していた。それは、彼らは明言はしていないけれども、これらのことばが、意味的には明らかに「机、太郎、夜」などと非常に異なった性質のものでありながら、なおそれらを同じ「名詞」ないし「体言」と感じさせる何かがある、ということに由来する。一方、それが「具体物」を指すことばか「抽象的な概念」を表わすことばかといった識別で解決すべきものでないことも気付かれていたと思う。抽象的概念というなら、「愛情、歴史、時間、空間、事情、予定」といった名詞も抽象的概念に違いないが、これらの名詞をコト、ハズ、トコロ等々と一緒に「形式名詞」として挙げている文法家はいないからである。意味

的特徴づけを断念しなければならないとすれば他に客観的などんな規準が考えられるか。印欧語のような格語尾変化や単複形の存在といった形態論的な規準も日本語では求めることができない。とすると、さし当たり残るのは構文的（統語的）規準である。日本語で構文的特徴といえば、すなわち語の「係り係られる」さまにおいて見せる特徴に他ならない。そこで先に見た山田、および松下の「常に何ものかによって係られる必要のある名詞」といった定義が出てくるわけであるが、これですっきりするかというとそうでない。それは山田自身、「しかれども又まま単独に用いられることなきにしもあらず」と認めているように、何ものかによって係られなければ決して自立できないもの（ハズ、トオリなど）から、何ものかによって係られるのがふつうではあるが、それ自身で自立することもできるもの（トキ、トコロ、前など）までいろいろあるからである。ということは、「自立性」の有無もまた決定的な規準にならないということである。何か他の規準で括られたものの中に、自立性の強弱を認めるというのが順序だろう。

それに係る語句が必要か否かということが少なくとも第一の規準になり得ないとすると、考えられるのは、係る語句がある場合、その係りの形式を規準にすることである。そして、もう一つは、その語が（先行の係り部分と一体となった——佐久間流にいうとそれを吸着して）次にかかっていく、その形式を規準にすることである。そのいずれの規準にもいくつか段階があろうことが予想されるが、それはともかく、その語に係る形式（前接の形式、以下便宜上「承」または「承ける」形と呼ぶ）と、その語が後に係っていく形式（後接の形式、便宜上「接」または「（後に）接がる」形と呼ぶ）との両面において、「ふつうの名詞」（つまり「机、太郎、花、愛憎、時間」など）と同じ様相を呈するなら、特に「形式名詞」あるいは「名詞の形式化」ということを取り立てていう必要はないことになる。問題は「承」か「接」のいずれかの面では他の名詞（実質名詞）と変わるところはないが他の一面では名詞と違った動きを見せる、あるいは一般の名詞と同じに扱うには余りに制約が多いということが見られる場合である。

一つの語が文中での使われ方によって二つあるいはそれ以上の品詞と認められること自体はどの言語においても見られることであろう。たとえば、英語でも、who, which, when などが疑問代名詞になったり関係代名詞になったり接続詞になったりするし、on, in などが前置詞として使われたり副詞として使われたりする。中国語では同じ言葉が名詞なのか動詞なのかは文中での使われ方を見なければわからない、といったこともよく聞かされることである。しかし、日本語のハズ、ママ、トコロなどの「二面性」は、これらのどれとも性質を異にする。ママを例にとっていうと、それは「ソノ——」「服ノ——」「未熟ナ——」「気ノ向ク——」「靴ヲハイタ——」などといった環境に現れるという点では全く他の名詞と異なるところがないという一面をもつと同時に、それらの先行の（限定、修飾する）形を承けとめて全体をいわば副詞化し、次の用言にかかっていく、つまり連用修飾句化する一面をもっているのである。このような二面性をしていて英語に求めるとすると、例えば、'I wonder who he is.' の who が、従属節 'who he is' の中では疑問代名詞であるが、同時に主節との関係では代名詞節を導く接続詞の役割りをしている、というようなのが似ていよう。'as is often said'

の as なども同じだろう。

これらの語の接の面だけに着目して、トキ、ホド、ノチなどを「接続詞」としてしまうことは、確かに山田の攻撃したように（同書一四七七頁以下）西洋文法からの思いつきで「皮相」な見解だといわれても仕方がないであろう。しかし山田もまた、これらをあくまで体言とする根拠は充分に客観的とはいえず、また上のような名詞のもつ重要な二面的機能を軽視する結果にもなっている。

以上、いわゆる形式名詞の一般論を低徊しすぎた嫌いがあるが、このあたりで一応まとめておくことにしよう。

まず、ある語が名詞であるか否かの認定は、「承」と「接」の二面における構文的特徴を規準としなければならない。ここでは、一応、先にママについて見たようないくつかの形式を承けるか否かを、承における名詞性のテストとし、後に格助詞のガ、ヲ、ノ、ニ、カラなどが付くかどうかを接における名詞性のテストとする。当然それぞれについて程度の差が出て来よう。この両方の面で名詞性を完全に持っているものは、ふつうの名詞と構文的には一応変わらないことになる。

次に、右のような両面で名詞性を認められても、自立性ということになるとふつうの実質、独立の名詞と同じとはいえないものがあるだろう。そのことは、たとえば、「コレハ／ガ――ダ」というような枠に入るかどうかとか、「――ハ……」と裸で主題として持ち出せるかどうかといったテストが客観的な規準として考えられるだろう。

第三に、承の面では名詞性が高くても、接の面でいろいろな制限をもつものがある場合を整理する必要がある。実際に従来形式名詞とされているものについてこれを見ると、そこには大ざっぱにいって二つの方向が認められる。その一つは、トキや、先のママのように、助詞「ニ」がなくても副詞的に働くことのできる性質をもっていて、それが、前に来るいろいろ形を承けた後も、下の節に向って（全体として）副詞的にかかっていく場合である。これを「接続助詞化、あるいは副助詞化の方向」と呼ぶことにする。そして、ニ、デ、ヲ、その他の助詞を使って全体を「副詞節」化する場合も、これに含めることにしよう。もう一つの方向は、名詞がダ、デアル、ガアル、ニナル等の形式的な動詞に伴われて文をしめしくるのに使われる、いわば「文末心態（ムード）助動詞化」の方向である。

右のように、名詞を、自立性の強いものから弱いものへ、名詞性の強いものから弱いものへ、接続助詞的・副助詞的性格を帯びるもの、心態の助動詞化するもの、というふうに仕分けするとき、あるものはどこかに固定的に位置づけられるが、また中には、形態的には同じでも、いろいろな局面に多角的に現れるものがあることが分かる。そのような多角的なことばについて、その現れ方に対応して内容がどう変わるか、ということが観察されねばならない。それが「シンタクスと意味の相関」ということに他ならない。

本稿が、いわゆる形式名詞といわれる一連の語の本質の研究の一環として、まず「トコロ」をとりあげるのは、それが右に述べた意味での「多角的」な機能をもつ語の典型的なものだからである。おそらく同じ程度に多角的なものにモノがあり、次いでコトがある。接続助詞化ないし副助詞化したものや、文末助動詞化したものはいずれも意味内容が複雑で、それらをお互いに対立させ、また交錯させている弁別的特徴を拾い出すことは非常に難しい。それはしばし

ば話し手の、その発話を包む文脈や状況に対する判断や予期、またそれを聞き手に暗示しようとする意図などにも関わっているからである。以下の観察は、それらを全体として体系づけるための予備作業の一つに過ぎない。

以下、トコロについて、右に見てきたような構文的機能の各段階における意味を見ていくわけであるが、便宜上、それらの段階を大きく二つに分け、まずはじめに構文的には実質的な名詞としての性質を保持したまま使われる場合と、形式化した場合――つまり接続助詞化した場合と文末助動詞化した場合――のそれぞれについて見ることにする。

## 二　実質名詞としてのトコロの用法と意味

まず比較的簡単な例から見ていこう。実質名詞として使われているというのは次のような場合である。

(1)ここはコピーをとるところです。

(2)百メートルほど行ったところに野井戸があった。

(3)何かあったら、私のところへ来なさい。

(4)父は朱筆をとって、ただ一ところ、ことばをあらためた。

「これで非のうちどころはない」

その朱を入れられたところは、宗頼もまた迷ったところであった。

（石川淳「紫苑物語」）

実質名詞としての用法というのは、右のような例のトコロは、その後の助詞をいろいろにいいかえたり、「私の」を「太郎の」その他に入れかえても、トコロの意味は一定しているということである。このようなトコロの意味は、辞書にふつう記されているように、「場所」「位置」つまり空間のある一点を指すと一応はいえるだろう。しかしもう少し仔細に見ると、このようなトコロにも、具体性の高いものからかなり抽象的なものまで色合いが微妙に異なることが見られる。そのことに構文的な裏付けをする一つの手段として、トコロとそれを修飾する部分との関係を調べることが考えられる。

一般に連体修飾には、

太郎が拾ッタ富クジ（↕太郎が富クジヲ拾ッタ）

のように、被修飾名詞（以下三上章の用語「底」を使う）と修飾部が単一の文（↕の下の文）を構成するような関係（以下「内の関係」と呼ぶ）を含む修飾と、

太郎が富クジヲ拾ッタ翌日

彼女が稲ヲコク姿

塚ヲ掘ッタタリ

のようにそうでない場合（「外の関係」）とがあり、前者の底は実質性のある名詞なら何でもなり得るが、後者の底になるのは一定の意味特性のあるものに限られる。

トコロは、コトや「結果、姿、話」などと同じく、どちらの型の連体修飾も承け得る名詞の一つである。が、コトが、たとえば

aアナタガソノ時見聞キシタコトヲ、アリノママ証言シテ下サイ。

bアナタガソノ場ニイタコトハ他ノ人ノ証言デ明ラカニナッテイル。

というふうに、内の関係（a）の底になっている場合と、外の関係（b）の底になる場合とで意味がやや異なる（bではコトの内容を修飾部が補充しているがaではそうでない）のと同じように、トコロもまた修飾のされかたによってその意味内容が影響されることが

見られる。先の例文(1)は内の関係の例であり(2)は外の関係の例である。一般に内の関係の底になっているトコロは「場所」でいいかえることができるが、外の関係の底の場合はできないようである。それだけ抽象度が高いということがいえるのではないかと思う。

この「抽象的なトコロ」は、日本文法全体の中で、ある名詞が「ところ」を指すかどうかということがかなり大きい意味をもつことに関わっていると思われる。一般に「ところ性」のない名詞(「私、時計、本」など)はココ、ソコ、アソコで指すことはできないし、「――へ来ル／行ク」「――デ何々スル」といった環境に現れることもできない。その場合は「……ノトコロ」のようにことばを補わねばならない。先の(3)はその例である。英語では'Come to me.'などといえるし、一方「ココハ――ダ」「コレハ――ダ」の区別はむずかしい。

これは文法論からやや外れるが、一体に日本人は動作の主体をところ的に表現することが多いというのはよくいわれることである。先の(3)のようなのは文法的に必要な場合だが、そうでなくてもたとえば「辰んところのおかみさん」のようにいうことが多いのは、このような日本人の好みからくるものであろう。しかしこの点はこれだけにして、トコロの意味の拡がりについてもう少し考えてみよう。先の例文(4)をもう一度見、同じような例として(5)、さらに(6)のような例について考えてみる。

(5)わたしはこの本から読みとったもの、わからないところを告げて、ケルケの教えを求めた。(臼井吉見「事故のてんまつ」)

(6)あたしはね、そそっかしい忘れっぽい男だよ、でもね、今までに嘘は、ひとかけらもついたことがない。ここがわたしのいいところだ。(加太こうじ「落語」)

(4)(5)は、なお「空間」の一点といえるが、(6)では、人間の性格の一部という意味で使われている。しかしこれを、「空間」「性格(または「事柄」)、あるいは後に見るような例から「時間」についていう場合というふうに分類することは、少なくとも余り本質的とは思われない。では(4)(5)(6)に共通することは何だろうか。それは「全体の中の一部」ということだろうと思う。

およそ具体的な事象の認識は時間と空間の軸の中で行なわれるが、空間の一点ということは、当り前のことだが、それを含む線や面が前提になっている。しかしここで殊更に哲学めいた議論をしようというのではない。いいたいのは、日本人がトコロということばを使って空間なり時間なり、あるいは人の性格なり、およそ事物のありかを示すときには、その「ところ」が全体の中の一点であって全体ではない(モノやコトとの違いの一つがここにあると思うが今は立ち入らない)という含みをもっているときだということである。その含みが、聞き手に伝わるには程度の差があるようで、(1)―(3)などではとり立てていうほどではないが、(4)(5)などではその含みが比較的はっきりしているし、性格描写に使われる(6)や、次の(7)(8)ではさらに大事な含みになっている。

(7)彼はその女を嫌いではなかった。ちょっと美しい女だったばかりでなく、どこか賢そうなところがあり、一方食えない感じもあったが……」(志賀直哉「暗夜行路」)

(8)白川夫婦が東京に居たころ二年近く隣家に住まって懇意になっていながら、きんなどが倫に気の置けるところがあるのもその重たい眼ざしと崩したところのない言葉つきや動作のせいなのであっ

た。（円地文子「女坂」）

「全体の中の一部」ということは、いわば全体の情景の中のある一点にスポットライトを当てることである。観客はそのライトの当たったところに注目するが、同時にライトの当たらない暗がりも視野に入れているであろう。これを表現効果の面からいうと、XをYだと全面的にきめつけてしまわず、「Yでない」という反論にも応えられる用心深い表現だということもいえる。

(9)（大山は）山岳の険阻なところから真言密教の修験道場となり……（松本清張「大山詣り」）

(10)ロバート・ケネディ上院議員の暗殺をはかった犯人の身元がヨルダン生れのアラブ系移民と確認されたところから、この暗殺計画の主な動機は……（朝日新聞'68・6・6）

この表現は会話でも見られるが、「……トアッテ」と並んで新聞でもよく使われる。「いろいろ他に理由があるかもしれないが」という含みが感じられ、「……カラ」の断定的な調子よりも好まれるのであろう。「……トコロヲ」は後にも見るようにいろいろな型があるが、右のような意味と同じようなものもある。例を一つだけ示す。

(11)「うしろから塩を撒かれたり、野郎がぶりぶりしているところを見ると、よっぽど大黒屋とは面白くねえ間柄にちげえねえ。そのくせに、つき合っているところは、たしかに妙だな。」（松本清張「大黒屋」）

右のように見てくると、この表現は巷間よく非難される「日本語の曖昧さ」の片棒をかついでいるといわれそうで、確かにそういう面もあるが、しかし英語にでもこういう表現がないではない。「……トコロガアル」に一応型として対応するのに'There is something about/in……'といういい方がある。しかし、トコロが、コトやモノと対立してもっている意味合いを英語で表現することは一般に難しい。翻訳などに当ると興味あることに出くわすがここでは日英表現の対照は割愛する。

以上見た例以外に、トコロにかかる部分が動作、出来事の表現である場合があるが、これは多く次のように文のつなぎや文末に出てくることが多いのでそこでその意味を考えることにする。

## 三　トコロの形式化の諸型とそれぞれの意味

この節では、トコロが、その承ける形式からいえば名詞性を保持しながら、次にかかっていく形式としてはかなり制限された形で特定の構文的機能を担う場合について考える。

まず、修飾部全体を包みこんで、（ニを伴わず）副詞的に次へかかっていく「……（タ）トコロ」という形がある。

(12)二日夜、警察に……（中略）……という届け出があった。警察が調べたところ、ポケットに……（中略）……がはいっていた。（新聞）

(13)昨年あたりから、若い主婦のあいだに花莚の愛用者がふえてきた。（中略）ところが、ここで面白いのは……（中略）……それを知って産地（岡山）の業者のなかで、若向けの近代模様を作ったところ、意外にそれが好評でない、ということだ。（毎日グラフ）

この形と、「……シタトキ」「……スルト」などとの区別はなかなか難しいが、ここでは立ち入らない。この形の一般的な意味特徴は、「あることが分からないという状況の中で、それを明らかにするために……してみた。すると、どうこうということが分かった。」というようにいえるだろう。常に過去の事象について使われる。

次に、トコロがいろいろの助詞に伴なわれて全体として副詞的に下にかかっていく場合を見ていく。それぞれの助詞との結合がそれぞれの意味を伴っている場合が対象であって、助詞が（後の動詞と呼応して）一般的に格表示の機能に止まっている場合は、前節の実質名詞のトコロ＋助詞と見た方がよい。ただその間の判定はかなり難しい。

まず、「……トコロヲ」という形を見てみよう。

先に二で、トコロが、「全体（ないし少なくとも前後左右）を視野に入れ、それを背景としてある一点にスポットライトを当てる」表現であることを見た。そこでの全体というのは一般に「静的な状態、ないし状況としての全体」だった。が、人はある事象の進展を一つの全体として見、そのある一点に焦台を当てるということもできる。

(14)ニューヨークのあるカメラマンが、ビルの窓からはいりこもうとする男を見つけて泥棒と直感、盗んだ品物をもって立去るところまでシャッターを切りつづけた。二十六才になるこの男、そんなこととは夢にも知らず、カーテンまでしめて行こうするところをつかまった。（UPIサン―朝日新聞）

これは、時間の流れの中での事象の進展を視覚化した表現といってもよいだろう。このように、ある出来事、あるいは動作を、ある始まりがあって終わりがある一連のできごとの一つの過程として捉えるとき、「……トコロヲ」という表現が出てくる。これは先の、状態的な場合の、舞台の上のスポットライトというよりは、いわば映画のフィルムのひとコマを止めて、そこに注意を集める、というふうに近いだろう。従って、後に続く動詞は、もっとも自然な運動としては「見ル、見セル、ウツス、描ク」といった種類の動詞が考えられる。

(15)その十五番ホームの列車に乗っているところをさりげなく見せるようにしなければならないわけです。（松本清張「黒い手帖」）

のようなのがその例である。同じ感覚的な動詞でも「聞ク」とか「匂ウ、感ジル」などはトコロヲはとれない。難しいのは、右のように特に「事象の進展」を対象（目的語）とするとはいえない種類の動詞と共にトコロヲが使われる場合である。先の(14)の後の方の「……ところをつかまった」が典型的な例であるが、この種のものをもう少し考えてみる。

(16)二日午後五時五十分ごろ、茨城県北浦に航空自衛隊のヘリコプターが不時着水した。乗っていた三人はヘリコプターもろとも約三メートルの湖底に沈んだが、窓をあけて次々に浮かび上ったところを近くで漁をしていた人に助けられた。（朝日新聞'67・2・3）

これは別に珍しい例ではないが、実は私が外国人に日本語を教え始めて間のないころ、プリントにトコロの用例をいろいろ刷って説明していたとき、学生に、トコロの意味は今までの説明で大体分かったが、なぜそこで「ところを」と「を」が使っているのかが分からない、と質問されて説明に窮した思い出の例文である。このような例はその後もいろいろ集めたが、未だにすっきりした説明がつかない。最近、変形文法の枠の中で、構文的にこのヲを説明しようという試みがあるが、(注三) 私には、このような、そしてまた次にも示すようなトコロヲのヲは、「格」という概念では押えきれないように思われる。後に出てくる動詞が類型化しにくいからである。「視覚」の対象としての事態の進展」というのでない場合のトコロヲには、一般に次のような意味的特徴が認められる。それは、「事態の自然な進

展があるできごとによってさえぎられる」という意味である。あるいは「ある一定の軌跡をえがいてきたもの（あるいはこと）の進行が何かでさえぎられる」というふうにいってもよい。「自然な」というのは、話し手がそう思っているということであり、また、話し手がそう思っているということを相手に暗示する気持ちも含んでいる。

(17)オ忙シイトコロヲオ邪魔シマス

という会話表現などにもそのことは現れている。

(18)ふつうなら九枚でやめるところを、お菊の幽霊はその夜にかぎって、「十三枚、十四枚……」見物人があきれて「もうやめろ、皿の数が多い」すると……　（加太こうじ）

なども そうだろう。ついでながら、この「ヲ」は、たとえば、

(19)「ほかを探せばいい。僕のことは、諦めて欲しいね」

「そこをお願いするのです。……」（大仏次郎「帰郷」）

とか、

(20)折角の幸運をこのまま埋もれるのは嫌だ。（松本清張「顔」）

などの「ヲ」と同じ性質のものだと思う。

先に、「事態の自然な進展が不測のできごとによってさえぎられる」といったが、この含みを少し延長すると、「ふつうなら当然こうこうであるべき状況の中で、それに反するできごとが起こる」ということにもなるだろう。

(21)友達はかねてから国元にいる親達に勧まない結婚を強いられていた。彼は現代の習慣からいうと結婚するにはあまり年が若過ぎた。それに肝心の当人が気に入らなかった。それで夏休みに当然帰るべきところを、わざと避けて東京の近くで遊んでいたのである。（夏目漱石「こころ」）

次は右の傍線部の英訳であるが、日本語のトコロヲの意味を巧みに伝えていると思う。

(22)…… It was in order to avoid an unpleasant situation that instead of going home, as he normally would have done, he had gone to the resort near Tokyo to spend his holidays.　(Edwin McClellan, KOKORO)

トコロは、事態の進展を（視覚の）対象とする動詞が後に来る場合は、先に見たように「ヲ」をとるが、「来ル、呼ビカケル、デクワス」といった動詞が来る場合は「ニ」をとる。「……トコロニ」の例は省く。

次に副詞的に後にかかっていく固定した形として「トコロデ」という形がある。

(23)もともと西洋と日本では言葉のジニアスが違うのであるから、模倣したところで程度は知れたものである。（谷崎潤一郎「文章読本」）

のようなのがその例である。「かりにあることが実現しても、それは目標に達するには不充分である」というような意味で、このような「トコロデ」は、「（何々シ）テモ」で置きかえることができるが、逆は必ずしもそうでない。この二つの違いについては立入る余裕がない。このような意味からして当然のことだが、このような「トコロデ」には、「イクラ」とか「ドレホド」といった先触れのことばが現れることが多い。

トコロの右のような意味の延長として「……ドコロカ」といういい方がある。が、これはすでに副助詞化してしまったものと見て（ソレドコロカ、また、ドという連濁現象からも）今回は対象から

省く。

以上はトコロがそのままで、または何らかの助詞を伴って、接続助詞的機能をもつ場合で、この点でトコロは、ホド、トキ、ママなどと共通する一面をもつ。

最後に、トコロが「ダ」の類を伴って、文末助動詞化する場合を簡単に見ておこう。「トコロダ」は、動きの動詞の「…スル」「…シタ」「…シテイル」「…シテイタ」という形を承けて、いろいろなアスペクトを表わす述語の類型を作るといわれる。しかし、アスペクトを表わしているのは、トコロの前の四つの動詞の型であって、「トコロダ」は、そのいろいろなアスペクト的な事実の認定を承けて、やはり、前後の文の流れ、あるいは事態・状況の中で、現在に焦点を当てるという含みを表わすのがその機能だと思う。(……トコロダッタは勿論、過去のある状況の中の一点を指す)「シテイルトコロダ」が「進行態」と表わすというだけなら、「雨ガ降ッテイル」の代りに「今雨ガ降ッテイルトコロデス」などといえるはずだ。

この型の「トコロダ」でより興味深いのは、やはり右よりさらに含みの幅の大きい次のような使い方であろう。

(24)普通なら即座に断わるところだが……

(25)「よかったわね。東京だったら、店も何も減茶減茶になっているところだわ」

これは、既に見たように、当然予想される状況がそうならないということを意味している。しかしこれは必ずしも「トコロダ」と文末に来なければならぬわけではない。あるいは先に見た「……トコロヲ」のように後につづくところが省略されていると見ることも可能だろう。その理解には、先行する「……ダッタラ」といった条件づけの表現が助けになっていると思われる。

このほか、トコロの多角性は、先の「……ドコロカ」のほかにも、「コノトコロ」とか、「トコロデ」といった成句化したところにも見出される。これらと類義語との比較も必要だが、今は余裕がなくなった。しかし、これらを含めて多彩な用法の中に現れるトコロの個性は、今までに見てきた本質的な意味の中にあるということができるだろう。トコロについてのこれ以上の理解は、同じように日本語独特の「抽象名詞」というべきモノ、コトとの比較をまたなければならない。(一九七八年一月)

(注一) 拙稿「連体修飾のシンタクスと意味 (1)—(4)」(大阪外大留学生別科発行『日本語・日本文化』第4〜7号、'75—'78)

(注二) 拙稿「日本語名詞の下位分類」(『日本語教育』12号'68)

(注三) Nakau, M., *Sentential Complementation in Japanese* (Kaitakusha, 1973)

Harada, S.I., "Counter Equi NP Deletion" (東大音声医学研究所年報七号、'73)

Josephs, L.S., "Complementation" (M. Shibatani ed., *Syntax and Semantics* Vol.5, Academic Press, 1976)

Kuroda, S.-Y., "Types of Japanese Relatives" (未刊) ('76)

(大阪外国語大学　教授)